

令和6年度 学校経営報告

府中市立府中第九小学校

校長 日野 正宏

1 今年度の取組と自己評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

- ・「一人一人の児童を笑顔に 学校に集う全員を笑顔に」をスローガンに、児童にとって学校が、自らが成長する場であるとともに他者との交流や体験を広げ、深める楽しい場所であること、保護者や地域にとっては、安心と信頼のおける学校であるとともに、児童の成長を共に支える担い手として、楽しく関わり合える場でこと、そして教職員にとっては教える喜びと働く意欲に満ち溢れた場であることを大切にしながら教育活動を展開した。
- ・タブレットを活用した授業や対話や発表など児童が能動的に取り組む授業の実践、オリンピックや地域のプロスポーツ選手、ドローンを活用したプログラミング学習など多彩なゲストティーチャーの招聘、地域学習や障害者理解学習における府中刑務所や「ワークセンターこむたん」等、諸施設との連携、児童同士の交流や児童の創意を生かした学校行事等の工夫により、児童が学校での学びを楽しむ場面を創り出すことができた。
- ・本校の伝統である「九小まつり」や地域防災訓練等の充実を図ることや青少対第一地区の活動と連携することを通して保護者・地域の方々と協働しながら、児童の育成に当たることができた。また、教職員の発想を生かした取組の充実を図ることで活気ある学校を創り出すことができた。
- ・『子供』を中心とする教育活動を、考え実行する」という考えの下、一人一人の児童を大切に教育活動に取り組んだ。本校の特色である「ふたば学級（知的障害固定学級）」「特別支援教室ひばり」を併設する強みを生かし、校内研究において特別支援教育の視点を踏まえ「みんなで創る学びの輪」～子供の思いや考えを引き出す指導の工夫～」をテーマに、児童の学びの様子をより詳細に捉えていくとともに、障害の有無に関わらず授業で主体的に活動し、活躍できる支援の方策を考え、整理していくことができた。また、毎週火曜日に校内委員会を実施し、児童について情報共有をするとともに、ふたば、ひばりの教員の専門性を活用し、児童一人一人の課題に寄り添い、「その子に合った取組」という視点から、日々の授業や生活指導や進路指導等に反映させ、個に応じた指導方法・指導内容の改善をしたり、環境調整を行ったりすることができた。

ふたば学級の児童と通常学級の児童との交流を促進することには課題が残った。

- ・昨年までの、東京都教育委員会の人権尊重教育推進校としての取組を基盤として、児童の自己を大切に、他者を大切に育むことに取り組んだ。地域の高齢者施設等との交流など様々な人々との交流からの学びや「挨拶」・「ふわふわ言葉」の励行など日常的な取組、道徳教育と関連付けた児童が考え、話合う活動の充実、教職員による児童の取組や行動の肯定的な価値付け等により、児童の自尊感情や他者を思いやる気持ちの高まりが見られた。しかしながら、依然として他者を傷付ける言葉遣いや行動もあるため、引き続き指導していくことが必要である。

(2) 重点目標への取組と自己評価

○「学ぶ喜び」のある学校～確かな学びを通じた「生きる力」の育成～

- ・基礎的・基本的事項の定着のために、e ライブラリアドバンスや学習ドリル、プリント等を活用

した反復練習、繰り返して練習することへの動機付け、児童による目標設定と振り返りなどを重視して指導したことにより、継続して取り組むことで成果を出せ、そのことによってさらに取組への意欲が高まる好循環が生まれてきた。児童一人一人の学習到達状況を一層細かく把握し、個々の児童が適切な学習目標の設定や自己の課題を克服するための学習内容の選択ができる力を高めることが課題となる。

- ・主体的・対話的で深い学びにつなげるために「発見すること」「対話すること」「決定すること」「表現すること」の視点を踏まえた問題解決的な学習の具現化を図った。週の指導計画の中にこれらの視点のうち、どの視点に焦点化した授業であるかを明記し、観察授業の指導略案には焦点化した視点の具体的な内容を記述することなどを通して授業改善に取り組んだ。授業の導入での各種資料を活用した児童の疑問や発見の意識の向上、ペアやグループでの話し合いと学級全体での意見交流の充実、いくつかの選択肢から自分の思いや考えに合致するものを選び決定する活動、タブレット等を活用した多様な表現等の学習活動が見られた。各視点に即した学習活動例を一層具体化、モデル化しながら教員の授業力のさらなる向上を図ることが課題となる。
- ・交換授業、一部教科担任制、学年・学級の枠を超えた合同授業等を実施したことにより、教員の専門性を生かした授業実践や児童の学習上の課題の共有、児童にとっての学習の意義に対する意識の向上などが進んだ。
- ・タブレットの機能や学習アプリの活用、各種 ICT 機器の活用を推進することで、児童が意見交流の際に活用し、多様な意見を整理しやすくなること、写真等を効果的に活用しながら学習のまとめをすること、インターネットを活用して自分が欲しい情報を自発的に見付け自己の課題解決に資することなどの効果が表れた。新たな学習アプリ等が導入される中で、授業での活用を促進し、学習効果を一層高めていくことが課題となる。
- ・全国学力学習状況調査では、国語の学習に対する意識や家庭学習の取組の意識に課題が見られたため本調査の結果の分析と分析に基づく授業改善の視点を全教員で共有した。

○「ふれあい」のある学校～豊かな心を育む～

- ・地域の高齢者施設との交流、障害のある方との交流、府中刑務所のラジオパーソナリティーの方の授業など様々な人々との関わり合い・触れ合いの機会を創出し、児童に様々な学びや気付きをもたせることができた。次年度以降も継続して取り込めるようにすること、また新たな視点で児童の知的好奇心を刺激しつつ心を育てていける題材の開発することが課題となる。
- ・フレンド学級、宿泊行事のまとめを次年度の学年児童にプレゼンテーションする活動、生活科での学年間交流、幼保小の連携における交流などの異学年交流、委員会活動やクラブ活動の充実を図った。異学年の子供たちに「伝える」ことや自己の活動が肯定的に評価されることにより、自尊感情や自己肯定感、他者意識やリーダーシップを発揮する力の向上が見られた。
- ・生活指導について、教員からのメッセージとしてより良い在り方を示すこと、児童に「より良い生活」の在り方を考えさせる機会を設けることを継続的に実施し、児童の主体的な行動変容を促した。互いに認め合い、支え合い、高め合う人間関係を構築できた側面がある一方、先の見通しをもたず衝動的に行動してしまう事例も見られ、繰り返し指導していく必要がある。
- ・音楽委員会による演奏と全校合唱など音楽集会を充実させるとともに、展覧会の実施、図画工作作品の校内展示の日常化により、芸術に触れる機会、互いのよさを認め合う機会、高学年児童にあこがれをもつ機会とすることができた。地域の教育力を活用する

○たくましさを育てる学校～健やかな体をつくる～

- ・体育科授業の充実、日常の休み時間での外遊びの奨励、府中ロープチャレンジ等の取組を通して、体力・運動能力の向上を図った。運動に親しみ、身体を動かすことを楽しむ児童が多く、府中ロープチャレンジでは学級集団の凝集性の高まりも見られた。運動を好む児童が多い反面、「上手にできないからやりたくない」「疲れるからやりたくない」などの傾向が見られる児童もいるため、個々の技能に合わせた運動の設定や苦手な児童でも楽しめるゲームの工夫などきめ細かく設定していくことが課題となる。
- ・保健の授業や健康診断時の保健指導、全校朝会での校長講話や生活指導の場面で健康に関する情報を子供たちに伝え、考えさせることを通して、自らの生活をよりよくしていこうとする態度の育成を図った。知識として理解しても実践に結び付かないケースがあり、家庭と連携した生活習慣の改善や給食センターと連携した食育の推進などを一層工夫することが課題となる。全国学力学習状況調査の児童質問紙の回答から、家庭でスマートフォンやタブレットを使っている時間が長い傾向が見られたため、改善を図ることが課題となる。
- ・オリンピック（女子7人制ラグビー 松田凜日選手）や市内プロチーム（ラグビー・サントリーサンゴリアス、女子プロ野球・読売ジャイアンツ）の選手から話を聞いたり技術指導を受けたりすることにより、運動の楽しさを実感したり、技能の向上のポイントを知ったりすることができた。またプロとして活動をするための心構え等精神面での考え方を聞くことができ、キャリア教育の充実にもつながった。

○「安全・安心・信頼」のある学校

- ・いじめの未然防止、早期発見、早期対応を徹底するためにいじめに関する授業、発生時の組織的対応、いじめ対策委員会による即応体制の構築と状況に応じた解決策の構築を、年間を通して実施した。子供たち自身が「いじめを絶対に許さない」という心情をもつことへの意識の高まりはあるが、「いじめ」という意識なく相手のことを深く考えない言動をする実態もあるため、指導内容の充実や頻度の増加を実行していくことが課題となる。
- ・不登校防止のために、家庭連絡を始めとする家庭と連携した対応に注力した。サポートルームの運用により、不登校傾向にあった児童への支援が手厚く実施できた。
- ・安全点検と迅速な対応により教育環境を整備した。校庭で児童が転倒した際に大きなケガとなったケースが発生したためその原因となった状況を市教育委員会と相談しながら改善するなど可能な限り早く・より安全にという対応をとることができた。また、青少対第一地区のパトロール結果を校内で共有したり、青少対が開催する綱引き大会の参加児童に広がりが見えたりすることで地域と連携した健全育成の成果が出た。
- ・地域防災訓練や交通安全教室など保護者・地域と連携した安全・健康教育等について、これまでの実施状況を踏まえた内容や運営の改善を図ることができた。
- ・スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、子ども家庭支援センターみらい等、関係機関と迅速に連携し、支援体制の強化を図ることができた。スクールソーシャルワーカーによる家庭支援は不登校の解決につながった。

○一人一人の子供を大切に作る学校

- ・毎週開催する校内委員会において、教員間の児童理解の深化を図り、一人一人の子供に寄り添っ

た組織的な指導体制の構築及び指導方法の工夫について協議し具体的方策を実施した。

- ・「ふたば学級」「ひばり学級」設置校であることを生かし、通常の学級における指導の工夫の交流などを推進することができた。校内研究においても児童への支援の手法を整理・共有することで合理的配慮の在り方や授業のユニバーサル・デザイン化などについて共有でき、児童が負担なく学べる環境づくりや支援体制、支援の方策の理解が進んだ。

○「小中連携、一貫教育」を推進する学校

- ・「小中連携の日」における教員同士の学校公開を年間3回実施し、小・中学校の教員同士が協議することで授業改善の視点を共有した。特に府中第一中学校が今年度取り組んだ「デジタルを活用した学び研究校」（東京都教育委員会）での実践報告を第一中学校区で共有できたことは今後の連携を深める上で有意義であった。
- ・6年生の中学校訪問の際に中学校教員による授業を体験することで、児童が中学校のイメージを具体的に持つことができ学校間の円滑な移行につなげることができた。

○家庭・地域と連携する学校

- ・スマート連絡帳を活用し家庭と学校の連携を深めることに努めることができた。
- ・スクールコミュニティ協議会で学校が抱える課題について具体的な提言をいただくとともに、学校運営を支えていただくことができた。サポートルームの支援員の人材の紹介や特別支援学級の児童と通常の学級の児童との交流のもち方などに具体的なアドバイスをいただくことができた。
- ・2年生の地域探検における府中刑務所の訪問や府中高校の校舎改築に伴う部活動への施設面での協力など新たな地域活動に取り組むことができた。府中高校部活動への施設面での協力をきっかけとして、府中高校女子バレーボール部による小学生のバレーボール体験教室を開催することができた。

○地域や学校を大切にできる心情を育てる学校

- ・郷土の森博物館等の施設見学や「郷土府中に根ざした道徳資料集」・「わたしたちの府中」「府中郷土かるた」を活用し、郷土府中を知り、大切にしていこうとする心情を養うことができた。道徳授業地区公開講座では複数の学級で「郷土府中に根ざした道徳資料集」を使用した授業を公開することができた。
- ・委員会活動や学校行事での児童の取組や創意工夫を全校朝会での校長講話等で取り上げ積極的に価値付けすることで、学校へ周囲の人々のために頑張ることで学校が一層よい場所となっていくことを伝えていくことができた。
- ・卒業生や、異動した教職員等が再び学校に戻ってきて行事等に関われるような仕組み、「サーモン計画」は運動会に卒業生がボランティアとして活動してくれた。人のつながりを大切にしながら今後も拡充を図ることが課題となる。

○教育予算を効果的に活用し、教員の働き方改革を推進する学校

- ・学校経営支援予算等を運用することにより、サポートルームや学級支援などに効果的に人材を配置することができ、児童が安心して学べる環境を整えることができた。
- ・副校長等校務改善事業を積極的に活用することや、業務内容、行事等の精選を図り、教員の勤務時間外の在校時間の縮減を図ることができた。

3 次年度以降の課題と対応策

(1) 学力向上

○「学習の主体者は児童」であることを念頭に、個別最適な学びと協働的な学びについての実践を深める。

【対応策】

- ・「授業改善委員会」を新たに立ち上げ、本校としての個別最適な学び・協働的な学びの在り方や府中市教育委員会が示す4つの視点の授業での具体的な実践方法等を検討する。
- ・特別支援教育の視点を生かした授業改善（校内研究）・個別最適な学び・協働的な学びを推進するデジタル教材・デジタル教科書等の効果的な活用（授業改善委員会）の二本の柱で学力向上を目指す。
- ・一中学区としての連携を一層高め、義務教育9年間を見通した学習の充実を図る。

(2) 健全育成

【対応策】

- 「誰もが安心して生活できる」ことを目指し、児童の成長を促す指導の充実を図る。
- ・児童への肯定的な声掛けや挨拶の励行、対話等を重視し、自己肯定感や共感性、コミュニケーション力を高める。
 - ・いじめに関する授業や「心の天気予報」の活用、相談体制の周知等を充実させ、課題の早期発見・早期対応に努める。
 - ・サポートルームの支援内容を充実させ、一層効果的な支援ができるようにする。
 - ・ふたば学級の児童と通常の学級の児童との交流を深める取組を実施する。スクールコミュニティ協議会で提言いただいた通常の学級の児童がふたば学級に赴き給食等で交流するなどの方法を具現化する。

(3) 地域との連携

○「地域の中の学校」として多くの人が集う場となることを目指し、連携を充実させる。

【対応策】

- ・「九小まつり」を始めとする各種地域行事への参加児童を増やすため広報・周知を工夫する。
- ・既存の地域連携活動を大切にしながら、新たな連携や活動を模索する。
- ・地域防災訓練等地域の人々と学校とが協働して実施する活動の充実を図る。

(4) 校務改善

○「教員の働き方改革」のさらなる推進のために「時間対効果」の意識を高め、業務の質と量の均衡を図る。

【対応策】

- ・業務のスクラップアンドビルドを図るとともに、校務組織を見直し、責任と権限の細分化を行うことを継続する。
- ・デジタルを活用した校務改善について積極的に情報収集し、活用できることを取り入れていく。
- ・教員が心身ともにリフレッシュできるように、休暇を取得しやすい環境を作る。